

研究論文

ライフヒストリー研究の方法論¹⁾池田善昭²⁾

The Method of Studying a Life-History

IKEDA Yoshiaki

In this paper, I attempt first to show that we have to draw a sharp line between a biography and a life-history. In a biography the readers take a position of the calm observer with the writer, while in a life-history the readers can sympathize intimately with the feelings and the personal experiences of the hero. Because writers managed to get an insight into the hero's emotional depths of humanbeing.

I attempt secondly to show that method of biography is one-way process on the basis of epistemologies, while the method of life-history is a ontological way. I will make a trial of expressions at M. Heidegger's suggestion. He taught us that we had to draw a sharp line between epistemological und ontological ways. He said, the former to be "etwas her-und vor-stellen", the latter to be "etwas von sich her aufgehen lassen". We must not get the meaning wrong between "Herstellung or Vorstellung" und "Aufgang".

We have carried out a threeyear program on the study of japanese Philosopher, Kitaro Nishida's life-history. We take more interest in not "Herstellung or Vorstellung", but "Aufgang" or Nishida's life. This meant the innermost depths of his mind. We could not grasp the meaning in principle by the epistemological method.

Key words : biography, life-history, epistemological und ontological ways

キーワード : バイオグラフィー, ライフ・ヒストリー, 認識論的方法と存在論的方法

[] ライフヒストリーとバイオグラフィー

人格や思想が立ち上ってくる地平「ライフヒストリー」

ここに掲げる「ライフヒストリー」とは、従来のバイオグラフィーとは似而非なるものである。一般に、伝記ものや物語では、書き手は、人物の生の事実を「表 - 象」しつつできるだけ

忠実に現前化すること、その現象を生き生きと再現化することを意図するものである。そのために、読み手は、書き手と共に厳格な主観 - 客観の観察者の立場に立つことが求められる。つまり、主観 - 客観パラダイムの方法では、自然科学の研究方法と基本的に同じ認識態度をとることが余儀なくされる。

こうした態度で臨む場合、物語られるべき現象の見え方は、忠実な客観的事実の再現とはいえず、**パラダイムからくる制約により、事実の表層的で分析的とならざるを得ない。**だから、物

1) 本研究は、立命館大学人間科学研究所における 2000 ~ 2002年度プロジェクト研究B (西田幾多郎のライフヒストリー研究) の成果である。

2) 立命館大学文学部

事の存在の深層にまで届いたところから見える見え方ではなく、したがって統合的ではあり得ないのである。読み手は、結局、「それが何であるか」を部分的に且つ形相的に認識するのはあるが、そのものの全体と相互作用的にコミットすることはあり得ない。思想成立に関する研究というのは、従来、認識論的なこうした観察者の立場に立って、文献学を駆使するバイオグラフィーであったのだと思う。

かくして、人格や思想の見え方が表層的で分析的であればあるほど、読み手は、その人物の物語にコミットすることがなかった。それゆえに、それが英雄の行為や天才的ひらめきなどの物語である場合に、彼らの行為やひらめきは、読み手にとってどんなに面白く興味深いものではあっても、まったく別世界の所謂「物語」となってしまうのだ。しかるに、どんな英雄も、いかなる天才も、読み手と可能性を共有し合い、同一世界に内属しているはずの人物であるのなら、そこでの人格や思想の見え方は、深層的で且つ統合的であるに違いない。だとすると、彼らの行為やひらめきは、読み手に一層親密にコミットしてくるであろう。なぜなら、われわれのいう「ライフヒストリー」の地平とは、存在論が明らかにしているように、人間存在の深層と統合において存在の共可能性を基盤とするところに基礎付けられているべきものにほかならないからである。われわれのこの度の研究課題、人物の人格形成ないし思想成立の根源的仕組みを究明するに際して、われわれが人物の背景にあるこうしたライフヒストリーに着目するのは、そのためである。

「ライフヒストリー」研究の場合、物語の主人公の悲しみが大きさだけでなくその深さまで聞き手の悲しみとなるように、彼の経験は、語り手によって聞き手の経験に親密にコミットするものでなければならない。語り手による聞き手のそうした経験の共可能性がなければ、われ

われはいかなる人格形成や思想成立の奥義にも迫ったことにはならないだろう。いままでの思想研究の場合、語り手の研究対象についてだけ留意して、それ以前に聞き手の聞く態度の在り様について問われることはなかった。語り手は、まずもって聞き手の経験と可能性を十分共有し合えるように、おのれの気持ちを聞き手にも広く深く開いていなければならないと思う。運動の前に準備体操が必要なように、思想成立に関する研究に取り掛かる前に、語り手は、まずおのれのところを開く、すなわち自由な発想の立場に立つ訓練が必要ではないか。

「ライフヒストリー」とは、単に主人公の生涯にわたる出来事の歴史的な羅列でもなければ、また、主人公に陰に陽に影響を与え続けたその時代の時流や環境、ないし内属していた世界状況を丹念に物語るだけのものでもない。主人公の生活を成立せしめている時空上の、ないし時空を超えた存在の深い構造、その構造から派生してくるもの、深い所から立ち上ってくる諸々の表出を含めていうのである。われわれのいうライフヒストリー研究とは、人間存在の時空の深層から人格や思想が立ち上ってくる仕組みや、今度は逆に、隠れた存在の方がその人格や思想に導かれつつ露呈してくるその仕組みをも、そこで同時に明らかにすることを意図する。

ハイデガーのナチス荷担問題

たとえば、ここにハイデガーのナチス荷担問題というのがある。これは、影響力では二十世紀最大の思想家といわれるマルチン・ハイデガーが呈示した「謎」といわれる問題のことである。この謎とは、戦後、彼の戦時中のナチスへの積極的協力への反省の弁もなければ、それへの罪の意識もないと非難されてきたところのものである。ここでは、ライフヒストリーの地平から、所謂「ハイデガーの謎」といわれる問題を取り上げてみよう。

当時、ヨーロッパのもっとも洗練された哲学言語を駆使していた思想家が一転して、ナチのもっとも野蛮な言葉を語りはじめたのだから、人々に与えた衝撃は大きかった。その衝撃を回避すべく、ハイデガー擁護者たちは、あくまでもこの問題が彼の偉大な哲学思想とは無関係であって、ハイデガー思想の深遠さを分かつともしない輩の単なる対人攻撃に過ぎないものとみなした。他方、それに対して、ハイデガーの思想には、ナチズム（国家社会主義）を克服するために必要な、概念的手段に欠けるおぞましい根深い欠陥が潜むとする批判勢力が厳然と対峙したのである。

問題の核心は、多分、いみじくもリオタールがいったように、「敬うべきものとおぞましいものというハイデガーの二つの顔」の共存を確認するだけで問題の幕切れとすべきではない、ということにこそあるのだろう。リオタールが彼の著書『ハイデガーと「ユダヤ人」』（1988）の中で提言したように、われわれはそのいずれにもくみすべきではないのだと思う。なぜなら、そのいずれの側にも、ハイデガーの真義があってないからである。だとすると、どこかに敬うべきでもなくおぞましくもないハイデガーという人物がいることになる。彼は、一体、どこにいていかなる顔をした人物なのであろうか。

ハイデガーの真義がそのいずれにもあるといえたから、「ハイデガーの謎」といわれたのであったが、謎とはいえこの謎には、ただひとつはっきりしていることがある。それは、まさにリオタールが先に洞察していたように、ハイデガーの真義が同時にそのいずれにもないといえることである。そのことは、ハイデガーという人物において、彼自身の人間存在の奥行きの深い深層と真に統合すべき姿があらためて問直されているということの意味している。つまり、バイオグラフィックな認識論の方法では、ハイデガーの真義がそのいずれかにあるといえた

が、ライフヒストリックな存在論の方法では、そのいずれにもないといえたのである。

ヒューマニズムとアンチ・ヒューマニズム

ほんとうにハイデガーの真義に触れたいのなら、われわれは彼の思想を彼の「ライフヒストリー」から見てみなければならぬだろう。ハイデガーの思想成立を、観察者の認識する立場から「表-象」しつつ、できるだけ忠実に現前化してみようとすればするほど、われわれは擁護者（敬うべき顔）か排撃者（おぞましい顔）か、そのいずれかの態度をとらなければならないように思われる。だが、われわれの立つべき立場は、そうしたいずれの見方でもない。事実、ハイデガー自身、「表-象」「現前性」のものの見方をきわめて厳格に批判していたのである。つまり、ハイデガーは、西洋哲学に顕著な認識主観としての「精神」を極力避けているのである。その「精神」によって立つ立場を、われわれがハイデガーの別の図式で言い直せば、「認識論 = 主体性 = ヒューマニズム（人間中心主義）」ということになるのではないかと思う。

ともかくはっきり言えることは、彼はこうした「精神」の立場をすでに立ち去っていたということである。したがって、この立場にとどまらばハイデガーの思想を見ている者がいるとすれば、蝉殻を蝉と見なしているようなものである。ハイデガーに戦中の政治責任を糾弾し、反省の弁を迫り、戦後の彼の罪意識の欠如を嘆いてみても、そこにはすでに羽化して飛び去ってしまった後の蝉殻しかないのではないかと思う。だから、そこにはハイデガーの沈黙が残されているだけのことである。実際、ハイデガーのしたことは、沈黙するか繰り返し自己弁護に終始した。それは、先の図式に対していえば、「存在論 = 自然性 = アンチ・ヒューマニズム（反人間中心主義）」という独自の立場に立って

いたが故にである。この立場こそ、彼にとって容易に譲れない一線であったに違いない。厳密にそれを裏付けていたものこそ、ハイデガーを生涯一貫して貫いていた脱西洋近代の思想であったからである。その思想とは、近代認識論の下にあって、**伝統的存在論の根底に潜む存在概念**、**<存在 = 被制作性 = 現前性>**に対して対峙するところの、**フォアソクラティカー**にいう**<存在 = 自然 = 生成>**という**存在概念**であったのだと思う。

われわれは、一般に、ヒューマニズムを暗黙裏に前提しつつものを考えものを言う。しかし、そこにコミットすべき共可能的な根拠が厳格に示されてのことではない。なんとなくみんな一緒になってヒューマニズムのお題目を唱えているのである。だからこそ、ヒューマニズムの名の下に、言語道断たるテロ行為が跋扈し、愚かしい戦争が果てしなく繰り返されることになるのだと思う。ハイデガーは、もちろんナチの反ユダヤ主義の残忍性、ユダヤ人大量虐殺を「肯定」していたわけではない。かといって、彼の「アンチ・ヒューマニズム」の哲学は、ヒューマニズムの名の下に、したり顔にそれを「否定」するわけではなかった。ひとびとは、当然、彼のこの「哲学的・政治的無責任」を弾劾する。ヒューマニズムのお題目を唱える者たちからすれば、ハイデガーのその「反省のなさ」に我慢できないのである。われわれにも、そのことはよく理解できる。

「ハイデガーの謎」と「ハイデガーの秘密」

たしかに、ハイデガーの「謎」といわれるものがある。しかし、それは、無責任とか反省のなさとか凡庸な仕方では追及されるべきハイデガーの態度のことではないだろうと思う。なぜなら、彼ほど「より厳格に」(strenger) **世界に内属せんとした者は**、過去の思想家の中にはかつていなかったといつていいのだから。もし、

ハイデガーに「謎」といわれるべきものがあるとすれば、多分、それは、彼がまさに「秘密」(das Geheimnis)と呼ぶべきものの事態の中にこそあるのではないか。その「秘密」の中でこそ、ハイデガーが六十六歳のとき彼の故郷で行った講演『放下』の中で語ったように、「肯定と否定とを同時に言うこと」(gleichzeitig <ja> und <nein> sagen)ができるからである。もし、「ハイデガーの謎」といわれるものがあるとすれば、この同時性こそが最大の「謎」であるといわなければならない。

この最大の「謎」について、いまここで解き明かすつもりはない。また、その謎解きの見通しも立っているわけでもない。ただ、われわれがここで留意したいのは、ハイデガーにとってのものの見え方が**実に深層的で統合的である**ということである。**限り無く奥行き深い統合性**がそこにはある。彼は、それを「放下」(die Gelassenheit)とも、また「存在」(das Sein)とも名付けているところのものである。われわれの研究意図は、「ライフヒストリー」の由来において、思想成立を「存在」にまで届くところから見て取ろうとするものである。また、人格形成を「放下」の目安のもとに見て取ろうとするものである。というのは、人物の「ライフヒストリー」は、それぞれの「存在」ないし「放下」においてこそ、**もっとも徹底した統合性を示す**からである。

この限り無く奥行き深い統合性の中にこそ、「ハイデガーの秘密」は隠れている。たしかに「認識論 = 主体性 = ヒューマニズム (人間中心主義)」の立場からすれば、ハイデガーのナチス荷担はあくまでも許し難い態度であるし、そこに踏み止どまる限り、ハイデガーは「おぞましい顔」である。しかし、それはなにもハイデガーに限らない。その点で、われわれはすべておぞましい。唯一の被爆国として辛酸をなめたわが国に、戦勝国とはいえ一言の謝罪

どころか自省心のかけらもない米国は、「ヨーロッパのもっとも洗練された哲学用語」を駆使していなかったから、罪が軽いというものでもないだろう。更に言えば、公然とヒューマニズム賛美の下にあって、負い目どころかまったく罪の意識がないともいえる。結局、みずからの「おぞましい顔」さえ見えていないのである。それに対して、ハイデガーではヒューマニズムの下にもはや止どまってははいないのだから、**それが見えていながら素通りすることになるのではないか**。つまり、もしハイデガーが謝罪と反省をなせば、彼自身、覚悟しておのれはすでにそこにいるはずもないヒューマニズムの中にいることになる。このことは、「先駆的覚悟性」の立場に立つ思想家にとって、どうしても許すことのできない自家撞着を示すことになるのではないか。

ライフヒストリックな存在論の方法

ライフヒストリーの究明の仕方は、かくしてバイオグラフィックな認識論の方法では示し得ないところのものまでよく見えるようにする。表層的に止どまるべきではないところでは、あくまでも存在論の方法によらなければならぬ。すでに先に示された通り、存在論の方法とは、人物の生き様を単に生き生きとした現象の認識というのではなく、「^{フュ}生きた^{シス}自然」それ自体の立ち上りとして見てゆこうとする見方、すなわち存在 = 自然 = 生成と見る見方、その見方に従うやりかたなのであった。それは、バイオグラフィックな認識論の下にある伝統的存在論の根底に潜む存在概念 < **存在 = 被制作性 = 現前性** > の見方に対して対峙するものであった。それはまた別の言い方をすれば、次のようにもなるだろう。

従来の認識論的なもの見方、つまり、人物の生の事実を「^{ナマ}表 - 象」「**現 - 前**」として見る見方のことであるが、ハイデガーは、それを

「あるものをこちらへ向けて、そして前へ - 立てる」(etwas her-und vor-stellen) といった言い方をする。ここでの「こちらへ向けて立てる」(her-stellen)とは、まさに < Herstellung > (制作) のことを意味し、「前へ立てる」(vorstellen)とは、まさに < Vorstellung > (表象) のことを意味していたのである。

それに対して、ハイデガーに従って、**ライフヒストリックな存在論の方法**を言い表せば、「**あるものをみずから発現せしめる**」(etwas von sich her aufgehen lassen) といった言い方になるだろうと思う。ここでの「発現せしめる」(aufgehen lassen)とは、まさしく < Aufgang > (立ち上ってくること) を意味するのである。そこでいわば「それ自体立ち上らせるままにせよ」といっているのである。これは、先の作為を意味する「ポイエーシス」に対して、生起としての「フュシス」ありのままをいっているのである。このようにしてわれわれは、**バイオグラフィックな認識論の方法**に対して、**ライフヒストリックな存在論の方法**を対峙させることに関して、厳格な仕方方法論的にその差異性(方法論的差異)を論ずる意義を理解することができる。つまり、**バイオグラフィックな認識論の方法**では、どこまでもハイデガーの「謎」は謎として残るであろうが、**ライフヒストリックな存在論の方法**では、その「謎」が「秘密」へと転換することが示され得るのであった。ハイデガーの「秘密」について論及せんとすれば、更に詳細な論議を慎重に重ねることになるであろうが、それは、ここでの主題ではない。ここで明らかにしたかったのは、思想家の思想成立に際して、われわれの研究のための方法論についての手掛かりとなるものを提起することである。

[] 西田幾多郎の事例研究

ライフヒストリックな存在論の方法の実際

この度、個人史の事例研究として日本思想を体現している西田幾多郎を取り上げることになったが、その事例に即して、ライフヒストリックな存在論の方法の実際を、早速ここにひとつ示してみたいと思う。西田という人物を思想家として見るときに、彼の思想の何たるか知らしめるひとつの出来事がある。それは、彼の生涯で体験した多くの苦悩の中でも、多分、もっともひどく苦悩した出来事のひとつであったに違いない。それは、最愛の嫡子、西田謙を失ったときのことである。彼は、三高を卒業して京大の角帽をかぶるはずだった6月(1920.6.11)、もっとも輝ける盛りに急逝してしまうのである。

西田は、翌年になってもわが息子の死を容易に忘れ去ることができなかった。一月半ばの日記に、「けふ謙を夢む」と大書して、次のような歌が詠まれている。

死にし子と夢に語り冬朝さめての後の物のさびしさ・・・・・・・・・・[A]

それまでにいく度となく夢枕に立ったわが息子と語り合ったことであろう、その夢にまで見る女々しさ、意気地のなさ、未練がましさといったおぞましいおのれに愧じる西田の姿が彷彿としてくる。たしかに「物のさびしさ」には、尋常ではないいたたまらない何かがある。なりふりかまわぬ深い悲しみが感じられる。哲学者として高名な人物というのではなく、ごくありふれたひとりの打ち拉がれた親の姿がある。現前に立ち現れるわが息子、謙は、西田の夢の中では「死にしものとは思われず」であったに違いない。「月日ふれど死にしものとは思われずありし昔の偲ばるるかな」という歌もある。西田は、この不幸に出会うまで、ほとんど歌など作ったことがなかった。だが、これを契機に多

くの見事な和歌が残されてゆく。そのときの苦悩を詠んで、「魂は死しむくろのこりて人並にのみて食ひて笑ひてぞ居る」というのもあるが、慟哭に咽びつつ悲愴ここに極わまれりといった感じがする。ただ、救い難い悲しみ、癒し難いむなしさのみが感じられる。死にし子、わが息子をいく度となく夢にまで「表-象」する「現前性」に、執拗に囚われ続けるこうした西田の姿から、悲しみやむなしさが消えるはずもなかった。彼は、思い余って、息子謙の大きな写真をこれ見よがしに張り付けた『カント全集十巻』を三高図書館に寄贈したりしている。その第一巻の見返しに「すこやかに二十三まで過ごし来て夢の如くに消え失せし彼」という歌が未練がましく添えられていた。

しかるに、「死にし子と夢に語り冬朝さめての後の物のさびしさ」と詠まれた歌は、後になってもうひとつ別の歌へと姿を替えてゆく。それは、

死にし子の夢よりさめし東雲の窓ほの暗くみぞれするらし・・・・・・・・・・[B]

というものである。これは、先の元歌[A]といささか趣が違っている。否、全然別の心境が吐露せられているというべきものではないか。「東雲の窓」には、有明の死し子の残夢ばかりではない、新春の寒々とした薄明も重ねて映されているのだ。つまり、夢の中の生きた姿と現の中の死し姿とが重なって見えているのだ。この重ねて見せるところに、西田の懐の深さ、心の奥行きの深層を感じさせるのである。そこには、わが息子の生死を突き抜けたところが感じられる。西田のこうした心境は、やがて「場所」の思想へと結実してゆくのであるが、その経緯はそれから三年後の次の歌によくあらわされていると思う。

我心深き底あり喜びも憂の波もとどかじと思ふ・・・・・・・・・・[C]

余計な説明無しに、ここでの〈深き心の底〉

は、明らかに先の歌 [B] の「東雲の窓」に該当するものと理解できる。[C] を仲介して [A] から [B] への転換を見るとき、そこに明らかに西田の放下した心境の変化とその仕組みを理解することができる。「さびしさ」の地平を突き抜けてゆく奥行きが見える。彼の心の奥行きの深層は、夢の中とはいえ、わが息子を「表・象」しつつ「現前性」とする限りにおいては、多分、見えてこなかったに違いない。「死にしものとは思われず」僥ばるる者であり、「消え失せし彼」を悲しみ、「死にし子と夢に語り」間は、見えてこなかったものである。西田幾多郎の思想研究が、彼の悲しき心、僥ばるる心に留まるものとすれば、それは生活地平を意味する「パイオグラフィー」でしかないであろうが、彼の底深き心にまで届くものとすれば、それは生活の奥行きを意味する西田幾多郎の「ライフヒストリー」である。

地平と奥行き

明治36年8月3日、西田は、京都大徳寺の孤蓬庵で、広州老師により「無字」の公案を許されるが、その年の六月の日記に、事実、「学問は畢竟lifeのためなり、lifeが第一等の事なり、lifeなき学問は無用なり」と書き留めている。同じ時期の日記には、また、「余は禅を学の為になすは誤なり。余が心の為め生命の為になすべし。」とある。西田の思想や生涯は、禅を抜きに理解できないが、その禅そのものが宗教というより「ライフ」だというのである。西田の立場からすれば、人生の喜びも憂いもライフだということと同じ地平で、「禅はライフだ」というのである。ただ単に悲喜こもごもでないと感じられるのは、その地平の奥行きを指しているからに違いない。すなわち、西田では、地平は奥行きを伴っているものに他ならなかった。そして、彼は、その奥行きを伴った地平のことを、「場所」と名付けたのであった。

たしかに、西田の思想形成には禅との厳しい取り組みが認められるが、それは学問のためでも、ましてや社会的ステータスのためでもなかった。しかし、それらは「心の為」(人格形成)「生命の為」(思想形成)であるといいつつも、結局、功名心を満足させる学問成就のため、名誉心を満足させる大学教授になるためのものであった。西田の日記には、赤裸々に「我心いかにしてかくばかり私欲多きや」とか、「余はあまりに多欲、あまりに功名心に強し」とか、「名誉心など伴ひて心穏ならず」とか、「洋行がしたかったり大学教授になりたかったり」とか、「あゝ我何たる愚者ぞ」と深くみずからを愧じているのである。ここには、おぞましい顔を隠そうともしない西田がいる。彼の日記は、「敬うべきものとおぞましいものという西田幾多郎の二つの顔」が見え隠れしている。たしかに人生にはごまかし得ないおぞましいものがあるのであって、たとえ公案が許されたからといって容易にそれらが放棄されるものでもなかった。

ただ、地平と奥行きとの関係は、先の和歌にも象徴的に表現されていたように、救い難いおぞましき、癒し難いむなしさのみが表出されていて「奥行きの伴なわぬ地平」であった歌 [A] も、やがて「奥行きを伴った地平」とでもいふべき関係の仕組みを現わす歌 [C] になってゆく。「おぞましきもの」はつねに地平と奥行きとの境界領域に現われるが、その場合、その地平の現われに気付いていない場合 [イ], その地平の現われに気付きつつ否定する場合 [ロ], 否定しても否定しきれぬものと覚悟する場合 [ハ], それぞれの場合に別れる。[イ] の場合、恥を恥とも思わない「おぞましきもの」に対する鈍感な感性、この場合、そこに奥行きは現われない。[ロ] の場合、恥を恥として知るから「おぞましきもの」への感覚がある。この場合、そこに奥行きは所在として現われるが、そこへ深まることはない。奥行きの深層に向かうのは、

[八]の場合だけである。というのは、「おぞましきもの」への自覚が心の深層を穿ち地平を開いてゆくからである。それこそが西田によって「克己の意力」といわれる力への意志である。「おぞましきもの」「むなしきもの」こそが、「自家の安心」「生死解脱」のなんたるかを告知していたからに他ならない。世にいうヒューマニズム(人間中心主義)とは「奥行きに伴なぬ地平」だといえ、ひとは驚くであろうか。美名の下に呼んできたものこそ、紛れもなく「おぞましきもの」「むなしきもの」であったのだから。しかし、われわれは、これでようやく人並みにスタートラインの位置につくことができたのである。

[] 方法論の基礎付け

哲学の方法, 思想成立研究の方法

最近の境界領域や学際研究の深化にともなって「哲学」という学問の本質と原理も、いま、変わろうとしている。二十世紀になって所謂「哲学」といわれ続けてきた形而上学の解体撤去が試みられ、「脱構築」がさげられるようになって、人間の知性の有り様や学問のあるべき姿が真に再検討されるようになってきている。ここでは特に「複雑系科学」との関係において、いささか考察しておきたい。

存在の「複雑さ」(complex)を理解しようとするとき、現代の科学は、単に**機械論的な複雑さ、つまり、可逆的な複雑さ**だけでは真相に迫れないと気付きはじめた。その結果、複雑さには、本質的に異なる複雑さの原理というものがあることが分かってきた。したがって、それを扱う方法も当然異なるはずである。近代科学の方法ではいかんともし難い存在領域には、新たな方法が要請せられていたのである。複雑な存在概念では、近代科学の方法ではいかんともし難いにもかかわらず、いまだに分析的方法が

最終的に妥当するものと考えてきた節がある。力学概念の領域では、デカルトの方法ではいかんともし難いにもかかわらず、デカルトは彼の運動概念で把握できると思いついていたようなものである。つまり、complex systemとcomplicated systemの**ものの在り方の決定的な相違**について気付いていないのである。この「複雑さの差異性」は、ハイデガーの「存在論的差異性」に相当するであろうと思う。彼の指摘によれば、西洋存在論は「存在」(Sein)を「存在者」(Seiende)と取り違えた「存在忘却」の歴史であったが、それを真似ていけば、**複雑性概念において、complex systemとしての不可逆的な複雑性を忘却していた歴史**であったといえよう。真に複雑性をアンデンケンすることがなかった。

哲学の方法は、近代では眼前存在者の認識論であった。それについては、すでに冒頭でも触れておいた。バイオグラフィックな地平認識の方法は、complex systemすなわち**不可逆な複雑性を遮蔽している**限りにおいて妥当するものである。遮蔽された地平とは、「奥行きに伴なぬ地平」のことである。しかし、いままでの論述の通り、思想成立は、存在のその地平ではなく、むしろ**存在の奥行きから立ち上ぼってくる**ものであった。したがって、**思想成立の根拠を明らかにする方法を**なんとか確立するためにも、われわれは存在の複雑性を真に論究していなければならない。真の複雑性とは、「奥行きを伴った地平」のことであり、従来試みられてきたように、そこではバイオグラフィックな眼前存在の認識の方法はもはや妥当しないのである。それでは、そもそも複雑性とは、一体、いかなるものをいうのであるか。

複雑性の真義について

複雑性を意味するcomplexは、ラテン語のcom-plicareを語源としている。この言葉の原義

からすれば、「共に、たたみ込む」「共に、まとめ合わす」の意味である。また、その基本形 *plicare* からすれば、「共に、巻き込む」「共に、折り畳む」とでもいうべき言葉である。つまり、単に「まとめる」「畳む」というのではなく、前綴り *com-* を強調すれば、相互に巻き込み合うの意味でなければならない。一方向的に巻き込むだけのことなら、支配と被支配、能動と受動のように方向性は単純である。しかるに、双方向にお互いが巻き込み合うことになれば、そこでの方向性は複雑である。人間と自然の関係において、ヒューマニズム（人間中心主義）の立場は一方向的であった。認識論は、方向の単純性でもよかった。というより、その単純性においてこそ、認識論の方法は威力を発揮したのである。何故に認識論が存在の奥行きに向かうことがなかったか、まさにその理由はそこにある。しかし、ひとたび「存在の問い」が問われるとき、明らかに一方向性では済まされない。存在とは、方向性の複雑性に根拠をもつのである。

存在の複雑性について考察するに、それは、秩序層と無秩序層の境界に発生する「カオス」（*chaos*）といわれようとも、「でたらめ」（*random*）ということではあり得ない。もし、複雑性ということがランダムであれば、もはや存在は存在ではあり得ず、非存在といわなければならないからである。というのは、カオスには「歴史がある」（*history*）のであるが、ランダムには

「歴史がない」（*ahistory*）からである。逆にいえば、ヒストリーとは、カオスを含むものなのである。そして、そのカオスの故に、ヒストリーは果てしない奥行きをもつのである。思えば、その人物の「おぞましきもの」とは、彼のライフヒストリーにおける「カオス」のことであったのだと思う。

人間存在とは、つねにその奥行きの高さに「巻き込まれ」つつ、みずからの地平を「巻き込む」のである。その「巻き込まれつつ巻き込む」在り方にこそ、ライフヒストリックな存在論の方法は基礎付けられていたのである。それは、先に「奥行きを伴った地平」という言い方の中に示されたところのものであった。どこまでも（地平と奥行き境界領域として）地平が奥行きを伴っていたのは、存在の仕組みが「巻き込まれつつ巻き込む」在り方をしていたからである。人間存在における人格形成や思想成立の研究に際して、われわれがバイオグラフィックな認識論の方法に対してライフヒストリックな存在論の方法に着目したのは、気付き方には問題があるものの、ともかく存在のその仕組みに気付いていたからに他ならない。具体的な事例研究の中で、実際にその問題を究明してゆくしかないものとおもわれるが、いまは、地平と奥行き境界性並びに確かな連関性を確認することで満足するしかない。

（2002.12.17. 受理）